

# 停滞前線のもたらした “大なる遺産”

## □思わざる伏兵現る

11号台風は無事通過した。そして荒締切も一応完了した。ところがこの安心も束の間、停滞前線という予想もしない曲者がこのあとに現れたのだ。

24日昼頃、いやな雨が降りはじめた。と思っていると、夕刻から次第に強くなってきた。活潑な停滞前線が動き出したのである。しかも、これが台風以上の“大なる遺産”を残していったのだから、精密な人間の計算も、自然の気まぐれにはまだまだかなわないという外ない。日雨量を示すと、御嶽山では24日252ミリ、25日301ミリ、26日46ミリ、計599ミリ、またダムの上流部滝越付近ではそれぞれ207ミリ、130ミリ、49ミリ、計386ミリという記録的な豪雨、思わざる伏兵の強襲を受けたわけである。

## □荒締切流失

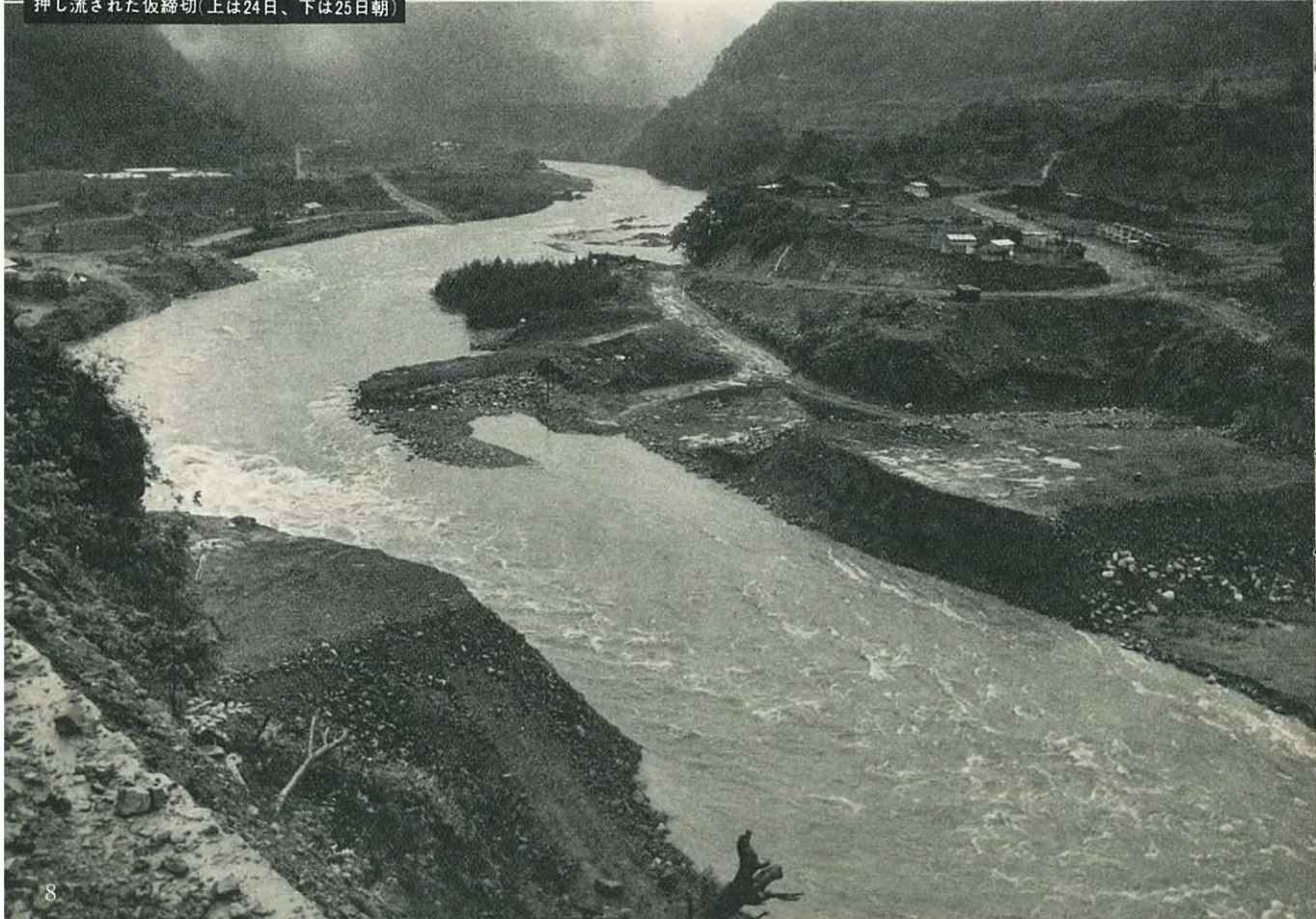
24日深夜滝越付近に集中した時間雨量27ミリによって、それまで流量30トン程度の静かな王滝川はたちまち奔流と化した。25日午前1時225トン、同3時には一挙に778トンと増水、この濁流はひとたまりもなく荒締切を押し流した。



500ミリの豪雨を集めて木曾川の清流も濁流うずまく



押し流された仮締切(上は24日、下は25日朝)



## □仮締切も中央部流失

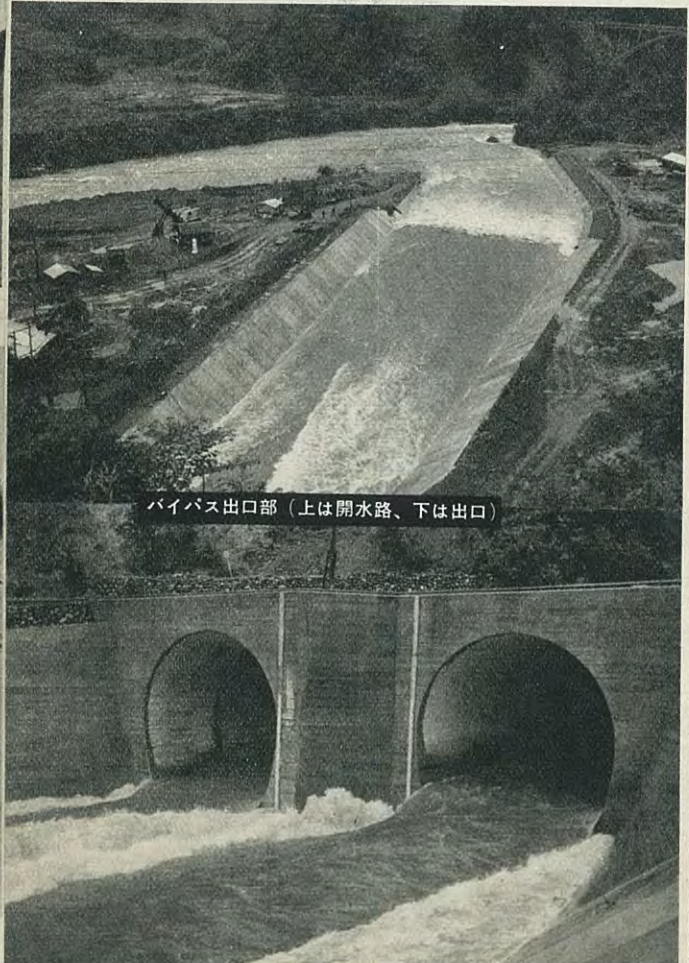
続いて25日から26日朝にかけての豪雨は、滝越で156ミリ、御嶽山では実に301ミリに達した。上流部の三浦ダムでは、25日午後10時から放流を開始したが、26日正午に至ってついに仮締切堤もその中央部を押し流された。60年に一度といわれる豪雨であるから、もはやいかなる防護策も役立たなかったに違いないが、それにしてもこの“停滞前線”というのは手のつけられぬギャングのような自然の暴力ではある。



かれがれの王滝川も一朝にして濁流と化す(牧尾橋上より写す)



折から記録映画の撮影に来山していた日映新社のカメラマン、勇躍して豪雨の中をぶっつけ本番



バイパス出口部(上は開水路、下は出口)



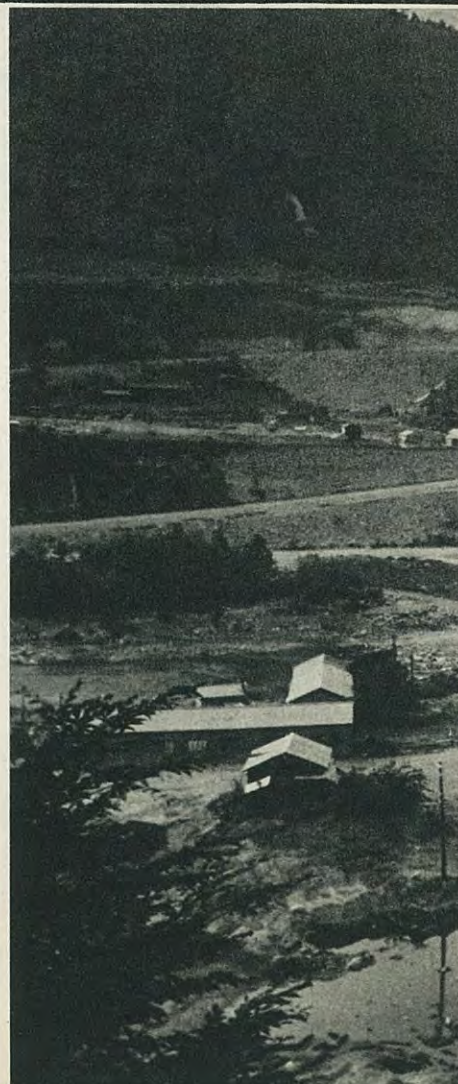
六段橋からみた濁流の王滝川



# 直ちに再開された締切工事 昼夜強行で急速な復旧



流失した仮締切の復旧は、減水を待って30日早くも開始され、翌31日には荒締切を完了、引続いて本締切堤に着手した。この締切堤の計画堤高は+823.50mであるが、重機械群の威力はフルに発揮されて8月中旬には完成の見通しである。なお復旧した荒締切には、法面に堅固な牛枠工が構築されている。



(上) こうこうたる照明下に夜も続けられる突貫工事  
(上・右) 早くも下流側仮締切堤に着手  
(右) 急スピードで復旧し完成近い上流側仮締切堤  
(以上8月12日写)





下流側からみた余水吐位置  
（矢印位置が深く掘削される）



上流部からみた余水吐位置  
（矢印位置が掘削中）

## 掘削を開始した 余水吐工事

### □山形あらたまるぼう大な掘削

牧尾ダムの築堤に要するロック(岩塊)は、111万 $m^3$ というぼう大な量である。

この大量のロックは、大部分余水吐の掘削岩が利用されるが、この余水吐はラクダの背のコブのような「中山」の中央を、上巾110m、底巾50m、深さ95mという大きな断面で、U字形にザックリとえぐりとりて施工される。文字どおり「山形、為にあらたまる」という格好だ。

### □活躍する重機械群

すでに、7月18日から爆破を開始して、切り取った岩をコッファ・ダムに使用しているが、ここで活躍している重機械は、容量2.3 $m^3$ という巨大なパワー・ショベル3台(P&H製)、22トンのこれまた見上げるようなダンプ・ホーラー9台(ル・ターナー製)を主力として、ほかに多数のダンプ・トラックやブルドーザーが動いている。一山を掘り崩してしまうといの工事であるが、パワー・ショベルのたくましい動きをみていると、「自然改造の深い爪跡」という形容がいかにも迫真的である。



活躍するP&H製のパワー・ショベル(2.3 $m^3$ )とル・ターナー製のダンプ・ホーラー(22トン)